

第7回住宅建築賞 審査講評

★応募作品25点中、第1次審査で各審査員が選考した5作品についての講評

大城元臣(沖縄県建築士会会長・審査委員長)

作品No.7 「ゆるやかにつながる家」

3面道路の敷地条件を旨くプライバシーを保ち、子供部屋と団欒の空間を吹抜けの手法でもっていつているのが好ましい。

作品No.12 「みどりに包まれた集合住宅」

建設コストを押えたコンパクトさ、住戸の独立性部屋と外部空間の考え方、集合住宅の収益性等、設計者の意図が明確である。

作品No.13 「無題」

立地計画、プラン、意匠とも力量ある作品である。

作品No.14 「Ohouse 離れのある家」

400坪の敷地を有効に生かし、平屋の二世帯住宅でのびのびとしたシンプルなプランが今風である。

作品No.20 「鈴木邸」

層積造の間取りプランの特徴がよく出ている作品で風通りもよくクライアントの亜熱帯気候での生活をしているのがうかがわれる。

武岡光明(沖縄県建築士事務所協会理事)

作品No.5 「クムイとマーチを囲む家」

祖父から受け継いだクムイ(池)とアーチ(松)が4世代を超えて、これからずっと建物とともに家族の歴史を造っていく住まいを感じ取ることができる。又、太陽光、屋上緑化・自然素材の仕上げ等積極的に自然を利用している。

作品No.13 「無題」

モダンで繊細されたデザイン力とディテールまで目の行き届いた繊細を感じる。ただ、住宅としては無機質な感があり、台風等メンテナンスが大変だと思う。

作品No.15 「お互いの気配があちらこちらにちらほらと」

2世帯としては、決して大きくない敷地にコンパクトにまとめられている。それぞれの空間の配置や視点の動き等、親子世帯と子世帯が楽しく生活している光景がうかがえる。又、プレゼンテーションもタイトルと写真が明快に設計者の意図を伝えている。

作品No.19 「H邸 中庭とスキップフロアで繋ぐ家族の輪」

狭い敷地の中で、家族それぞれの部屋を中庭・階段・吹抜けでつなげた明快な空間構成を感じる。

作品No.22 「ライトコートのある家」

2世帯を浴室・洗面等サニタリー部分を共有することによって‘つかず離れず’を表現した興味を持った作品です。

金城義治(日本建築家協会沖縄支部副支部長)

作品No.2 「さとうきび畑の中の家」

単純な間取り、軽快な外観、サトウキビの葉っぱの風になびく響きがマッチしている住まいである。。

作品No.4 「方形の家」

戸建住宅でよく整理された間取りである。2階部分にL・D・Kを配し生活空間から周辺の眺望を望む、コンパクトでシンプルなプランニングと外観も好感がもてる。

作品No.14 「Ohouse 離れのある家」

主屋と離れの住宅でL字型プランで構成された主屋と離れに和室が配置されている。テラスで囲まれ場が見逢うスペースであり、開放的な外観もさわやかである。この場に演出としてシンボルになる樹木が欲しかった。

作品No.15 「お互いの気配があちらこちらにちらほらと」

2世帯住宅の提案として選びました。間取りと断面構成に縦横の空間の繋がりが密に表現されている。それは親子の相互の関係、見逢う、造って見せる、気配など、クローズドになりがちな現在の家族の在り方の提案として評価。

作品No.16 「屋上リビングのある家」

2世帯住宅、吹抜けや1階と2階の屋根を利用して共有の柱を作ることで世帯同士の関係を密にしている。

作品No.25 「宜野湾の家」

戸建住宅の主屋と離れの和室の配置が良い。主屋の大きなキャピアーを利用し離れの和室との間にコンモンスペース創り出している、なかなかの雰囲気である。離れからの縁側を通しての外部空間への繋がりが、又内部や小屋組のデザインも良いと思う。

中島親寛(建築士会建築設計競技委員長)

作品No.1 「姉と妹二家族で暮らしを楽しむ」

現代では、原家族からの世帯分離により、核家族化が顕著な状況にあります。ここ沖縄でも例外でない状況にあります。この作品では、これらの「現代生活への問いに対する一つの答え」を見つけることができ、「いとこの森」を共有空間としながら、それぞれの住宅での個性を連結させ、各住宅と「いとこの森」との連関、生活の様態を容易に想像できる計画です。現代住宅での自己完結だけに着目される傾向が多

い中、「住まい」がどうあるべきかを提案した作品であり、親族間の繋がりが強い沖縄らしい計画だと感じました。

作品No.13 「無題」

この作品では、設計コンセプトが明確であり、これらのコンセプトを具現化した作品です。建物を建築することで「原風景」を壊さないようすることへの配慮、非常にシンプルでありながら洗練されたデザイン、そしてディテール図により設計者の建物に対する“想い”がより明確になっています。一見すると建築雑誌から抜け出してきたような“作品”ですが、類稀な素晴らしい作品を提案し、実現できるようになったと感じました。

作品No.20 「鈴木邸」

この作品では、「戦後の沖縄が歩んできた住宅素材」である「CB造、補強CB造」による作品であり、沖縄の建築構造素材の歴史観を感じます。単純な形状の中に住宅の諸要素を「設計者が提案する空間構成」としてあり、「住まい」に対する考え方を設計者自身が自問自答した経緯が説明文から読み取ることができます。

さらに、作品全体から「住まい手の生活感」が溢れ出しており、設計者が「施主の住まいに対する考え方」を十分に実現できた作品だと感じられ、加えて経年変化の状況により、「生きている住まい」を感じ取ることができます。

作品No.22 「ライトコートのある家」

この作品は、近年増えつつある「2世帯住宅」の作品です。他の「2世帯住宅」が垂直方向への積層による「長屋形式」であるのに対して、この作品では水平方向に対して「ライトコート」を介して2世帯を連結しています。

恵まれた敷地に対する計画であるものの、長屋形式とは違う「家族間の対峙と融合」が表現されている作品であり、都市と田園地帯では決して単一的とならないはずの2世帯住宅のありかたを提案している作品です。加えて、ライフステージにより「住宅の変容」を示唆している点も住宅のあるべき姿を提案している作品と感じました。

作品No.23 「西原の家」

応募作品では、「住まい手の生活感が溢れだすもの」「2世帯住宅」「離れ建築を内外の中間領域を介して母屋連結」した建築に大きく大別できる傾向がありました。

この作品では、社会趨勢ともいえる「高齢(化)」若しくは「高齢者に配慮した住宅」を根幹に置いた提案であり、時勢としてこれらの提案も設計者に求められ、これらを具現化した作品であると感じました。

高齢者住宅では「段差・手摺」などの身体機能の低下を補完するための方策が多い中、生活全般に配慮しながら、「これらの住宅のあるべき姿」を提案しており、加えて、環境にも配慮した計画であり、他の作品とは提案趣旨の相違などが明確な作品であると感じました。。

伊佐真吾(建築士会建築設計競技委員会委員)

作品No.4 「方形の家」

シンプルなプランとフォルム構成であるが、住宅地の中にさりげなく建っており、深い庇を囲むウッドデッキ、ウッドルーバーが街並みに柔らかく溶け込んだ印象与えており好感が持てる。

作品No.12 「みどりに包まれた集合住宅」

応募作品の中で数少ない集合住宅の一つ。各住戸を角部屋配置とし周辺のグリーンを借景として取り入れる事でプライベート性を上手く確保している。水廻り部分は専用庭に面して明るく気持ちよさそうである。また、収納量の確保など機能面も考慮されており、賃貸住宅として競争力の高さも伺える。。

作品No.13 「南風原の家」

設計コンセプトにもあるようにシンプルな設計テーマを深く掘り下げる事で、オリジナリティの高い建物となっている。計画地周辺との関係や建物外観の写真等が見たかった。

作品No.16 「屋上リビングのある家」

応募作品中たくさんの2世帯住宅があった中様々な断面的な工夫が見られたが、屋上庭園を提案した好例。1階への採光・通風など平面・断面に工夫を凝らす事で明るく気持ちの良さそうな空間となると共に2世帯の繋がりにもつながっている。

作品No.20 「鈴木邸」

移住者であるクライアントと共に、沖縄での住まい方の多様性を提案したオリジナリティあふれる住宅。外観は一見普通に見えるがプランニングや仕上げ材の選定、半セルフビルド的な完成させない住まい造りの在り方からクライアントの強い住むことへのこだわりを感じます。一般解ではないかもしれませんが、沖縄での家づくりに一石を投じる住宅と思えます。

作品No.21 「アウトドアリビングを持つ家」

眺望や周辺環境を上手く取り込んでいる。シンプルなプランニングではあるが開口部の取り方や細かい配慮により心地よさを感じる。声高に主張するのではなく周辺へ上手く融け込んだ雰囲気のある完成度の高い住宅。